

東京工業大学
超短期派遣プログラム（フィリピン）
2019 年 2 月 28 日～3 月 9 日
報告書



目次

0. 地図	4
1. 海外プログラムの目的	5
2. 参加学生の紹介と研修日程	5
2-1. 派遣プログラム日程	5
3. フィリピン概要	6
3-1. 歴史	6
3-2. 地理	7
3-3. 人口と宗教	8
3-4. 政治体制	9
3-5. 経済	10
4. 訪問先の詳細	11
4-1 デラサル大学	11
4-1-1 キャンパスの概要	11
4-1-2 講義の内容	12
4-1-3 学生交流	12
4-2. タガイタイ(Tagaytay)	13
4-2-1. 概要	13
4-2-2. オーガニック農場(Gourmet Farms)	13
4-2-3. 展望台(People's Park)	13
4-2-4. 市場(Mahogany Market)	14
4-2-5. 遊園地(Sky Ranch)	15
4-3. イントラムロス	15
4-3-1. 概要	15
4-3-2. フォート・サンティエゴ	16
4-3-3. マニラ大聖堂	17
4-3-4. サン・アウグスティン教会	18
4-4. JICA	20
4-4-1. JICA の概要	20
4-4-2. JICA フィリピン事務所の概要	20
4-4-3. 具体的な活動内容	21
4-4-4. 今回の訪問先 RITM(Research Institute for Tropical Medicine)について	21
4-5. 千代田化工建設グループ	23
4-5-1. 千代田化工建設株式会社の概要	23
4-5-2. Chiyoda Philippines Corporation (CPh)	23

4-6. MHPS GSC.....	23
4-7. Ebara.....	24
4-7-1. 荏原製作所.....	24
4-7-2. Ebara Pumps Philippines, Inc. (EPPI)	24
4-7-3. Ebara Pumps Philippines, Inc. を訪問して.....	24
4-8. フィリピン工科大学	25
4-8-1. 概要.....	25
4-8-2. 学生.....	26
4-8-3. 交流会	27
5. その他	28
5-1. 食事.....	28
5-2. 町の様子.....	31
6. 所感.....	32

0. 地図



図 0.1 日本とフィリピンの位置関係

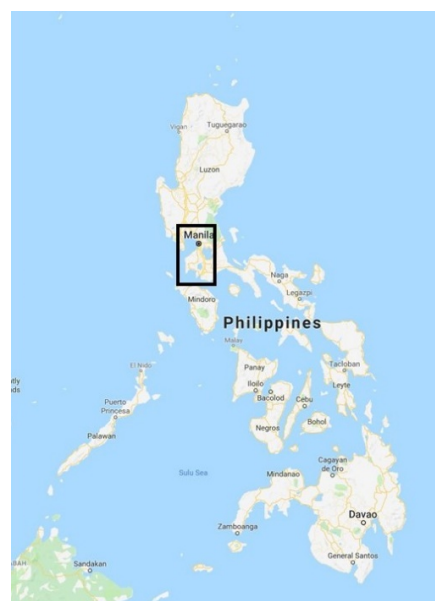


図 0.2 フィリピン全体



図 0.3 主な訪問場所 1

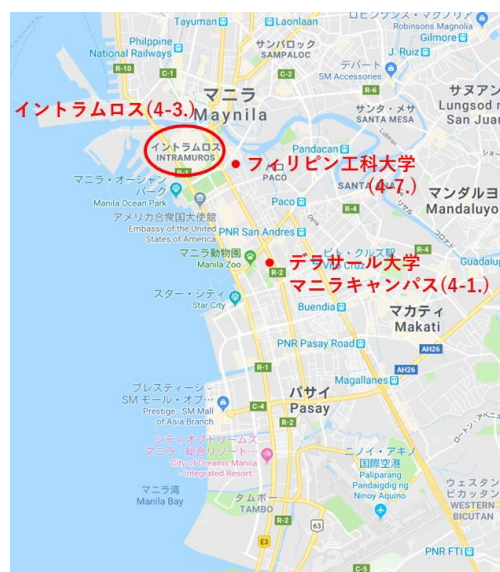


図 0.4 主な訪問場所 2

(出典：Google マップ <https://www.google.com/maps/?hl=ja>)

図 0.1 では日本とフィリピンの位置関係を示した。

図 0.2 ではフィリピン全体および、黒色の四角形によって図 0.3 のおよその範囲を示した。

図 0.3 及び図 0.4 では主な訪問先の位置を示した。

1. 海外プログラムの目的

本プログラムは下記の3つを目指すものである。

- 1) 海外という異なる環境において、危機管理を含め主体性をもって行動するための能力を養う。
- 2) 現地の社会や文化に触れそれらを学び、また大学において学生交流を図ることによって、異文化理解や語学力、コミュニケーション能力を向上させる。
- 3) フィリピン国内の日本企業を見学することや国際協力の現場を訪問することで、自身の今後のキャリア形成の参考となる経験を得る。

2. 参加学生の紹介と研修日程

2-1. 派遣プログラム日程

日付	活動
	活動内容
2月28日(木)	フィリピンへ出国
	マニラ空港にて両替、ホテルチェックイン、買い物
3月1日(金)	デラサール大学マニラキャンパス見学
	受講登録、キャンパスツアー、研究室訪問、解析学受講
3月2日(土)	タガイタイ見学
	Gourmet Farms 見学、People's Park(タガイタイで最も高い場所)、市場訪問、スカイランチ(遊園地)
3月3日(日)	イントラムロス見学
	Fort Santiago 見学、イントラムロス見学
3月4日(月)	デラサール大学にて英語クラス受講
	英語クラス、学生交流
3月5日(火)	デラサール大学にて英語クラス受講
	英語クラス
3月6日(水)	日本企業見学
	荏原製作所見学、三菱日立パワーシステムズ見学
3月7日(木)	RITM 見学、TUP 訪問
	熱帯医学研究所(RITM)見学、フィリピン工科大学(TUP)にて学生交流、ユニカセレストランにて夕食
3月8日(金)	英語クラス受講
	Villa Escudero 訪問
3月9日(土)	日本へ帰国

3. フィリピン概要

3-1. 歴史

フィリピン共和国 (Republic of the Philippines) は東南アジアに位置する共和制国家である。国名は、1542 年に、スペイン皇太子フェリペから、スペイン人の征服者ルイ・ロペス・デ・ビリャロボスによってラス・フィリピナス諸島と名づけられたことに由来する。フィリピンの国旗は 4 色から構成されており、それぞれ、白は平等と友愛、青は真実と正義、赤は勇気と愛国心、黄は自由を表している。 [1]



図 3-1-1 フィリピンの国旗 [2]



図 3-1-2 ホセ・リサル [3]

フィリピンは多様な民族により歴史が作られてきたが、国家形成においてはスペイン統治時代の影響が大きい。1521 年にセブ島にスペイン艦隊が到達した。そして、1529 年にサラゴサ条約でフィリピンはスペイン領として定められた。スペインに対する反乱は何度も繰り返されたが、いずれも規模の小さなものであり容易に鎮圧されてしまった。しかし、19 世紀末、フィリピン独立の父とされるホセ・リサル (José Rizal) により、独立運動が本格的となった。ホセ・リサルはフィリピンの国民的英雄であり、本プログラムでもイントラムロスのホセ・リサル博物館を訪れた。1899 年 6 月 12 日、初代大統領エミリオ・アギナルドの下、独立宣言がなされ、フィリピン第一共和国が成立した。

独立を果たしたものの、1898 年のパリ条約によりフィリピンの統治権がスペインからアメリカ合衆国に譲渡された。1899 年 2 月から 1902 年 7 月までフィリピンとアメリカは戦争状態にあった。その後アメリカに統治されていた時代が続くが、1942 年、第二次世界大戦をきっかけに大日本帝国陸軍はフィリピン全土を占領した。1945 年の日本の敗戦に伴い、フィリピンは再び独立の道を歩み始めた。

3-2. 地理

約 7641 の島々から成り、北部から南部にかけて、ルソン (Luzon)・ビサヤ (Visayas)・ミンダナオ (Mindanao) と大きく 3 つの地域に分けられる。フィリピンの首都はマニラ (Manila) で、マニラに隣接するケソン市 (Quezon) はフィリピンにおいて最大の都市とされている。



図 3-2-1 島の構成 [4]



図 3-2-2 ケソン市 [5]

フィリピンは西を南シナ海 (South China Sea)、東をフィリピン海 (Philippine Sea)、南西をセレベス海 (Celebes Sea) に囲まれている。また、フィリピンは環太平洋造山帯に位置しており、地震や台風の影響を受けやすい国の一つである。しかし、それと同時に自然資源に恵まれており、生物多様性に富んだ国となっている。面積は 300,000 km²、海岸線の距離は約 37,000 km で世界で 5 番目の長さである。マニラ東部に位置するラグナ湖はフィリピン最大の湖であり、マニラ湾に注いでいる。

フィリピンの気候は熱帯海洋性で、年間のほとんどは暑く湿度が高い。3 月下旬から 10 月上旬が雨季で 10 月下旬から 3 月上旬が乾季とされている。特に雨季は猛暑日で、洪水なども起こることから、衛生状態が悪くなり疾病の数も増加する。南西からと北東からの季節風があり、気温は 21°C から 32°C である。本プログラムの期間中も日中は常に 30°C を超えていた。

3-3. 人口と宗教

人口は約 1 億人とされており、人口はアジアで 8 位、世界で 12 番目の多さとなっている。さらに、フィリピン国外に約 1,000 万人のフィリピン人が生活しており、世界でも有数の国外生活者が存在する国である。人口爆発が続いており、今後の人口増加が見込まれている。

公用語はタガログ語と英語であるが、母語として使われる言語はフィリピン全土で 172 に及ぶとも言われている。スペイン統治時代の影響でスペイン語、華人の影響で中国語が利用されることもある。アメリカの植民地であったことから、アメリカ英語がかなり普及しているが、若い世代の人間はタガログ語と英語を合わせた「タグリッシュ」を話す人々が多い。以下にデラサール大学での講義中に学んだタガログ語の一部を示す。

表 3-3 タガログ語と英語の対応表

Tagalog	English
Magandang umaga	Good morning
Magandang gabi	Good evening
Salamat	Thank you
Pasensya na po	I am sorry
Galing naman	Good job
Tayo na	Let's go
Mahal kita	I love you
Paalam	Good bye

フィリピンは主にキリスト教国であり、スペイン植民地時代の影響でカトリックの信者が多い。全人口の 9 割がキリスト教徒とされているが、一部イスラム教徒も存在する。フィリピンには下図に示すようなカトリックの教会が多数存在した。プログラム中に訪れた San Agustin Church は博物館と教会が隣接した建物で、フィリピンの歴史や文化を学ぶ良い機会であった。

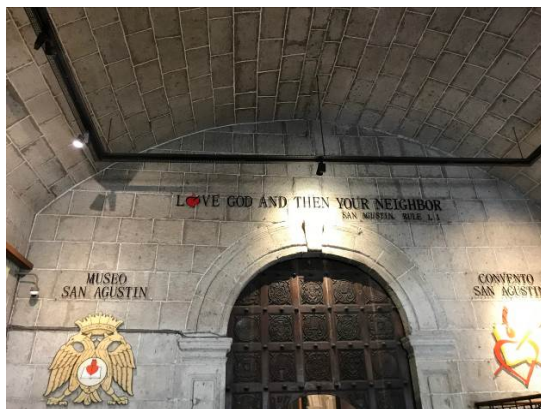


図 3-3 San Agustin Church (カトリックの教会)

3-4. 政治体制

フィリピンは大統領を元首とする共和制国家であり、大統領は国家・政治・軍事においての長を意味する。大統領と副大統領は、同日に別枠で国民の直接選挙により選出される。任期は6年である。現在の大統領は第16代大統領ロドリゴ・ドゥテルテ (Rodrigo Roa Duterte) である。過激な発言で知られており、フィリピンのトランプと揶揄されることもあった。しかし、政策実行力は非常に高く、国民からの支持率は高い。特に麻薬撲滅政策を強く掲げており、ドゥテルテは麻薬中毒者の疑いがあるものを殺害することを容認している。その言動から倫理的な問題があるとして、国際的な人権団体から抗議の声明が発表されたが、ドゥテルテ自身は強く反発している。



図 3-4 ドゥテルテ大統領

一方、地方政治家は、大土地所有の大地主で地方権力を握り、経済的支配を背景に、世襲政治家がはびこっており、地方政治家は自分の支配地では「好き勝手やり放題」という認識が多い。実際に現地の学生にもそういう認識の人も多く、政治の不安定性も国家の発展を妨げる一つの要因と思われる。

3-5. 経済

2018 年のフィリピンの GDP は約 3718 億ドルで、世界で 34 番目の経済規模である。主要な輸出品としては半導体、電気製品、銅製品、石油製品、ココナッツオイルやフルーツが挙げられる。また、主な輸出相手国はアメリカ合衆国、日本、中国、シンガポール、韓国などがある。使用されている通貨はフィリピンペソ（Philippine peso）で、プログラム参加時のレートで 1 ペソおおよそ 2 円であった。

フィリピンは基本的には農業国であり、全人口の約 4 割が第一次産業に従事している。熱帯に属することから多種多様な作物を作ることが可能で、サトウキビやココナッツ、タバコ、バナナなどの生産が盛んである。本プログラムではマニラ南部に位置する、Gourmet Farms Inc という農場を訪問した。こちらではすべての農作物が有機栽培されていた。マニラのような都市部とは対照的に美しい自然風景が広がっていた。



図 3-5 Gourmet Farms Inc

フィリピンは銅やニッケルなどの鉱物資源に恵まれた国で、かつてはインドネシアに次ぐ東南アジア有数の鉱産国であった。しかし、1980 年代から衰退し始め、銅の生産量は 1980 年の 30 万トン进行ピークに落ち込みが続き、この 20 年間で銅生産量は 10 分の 1 にまで落ち込んだ。しかし、未開発の鉱山もまだまだ多数存在しているとされており、フィリピン鉱産業の潜在能力は非常に高い。

サービス業は観光業と並び、今後フィリピンで最も成長し得る産業だと見られている。特にコールセンター業が有名で、労働力が安価であることと教育水準が高いこと、公用語が英語ということから、欧米企業で需要が高い。2010 年にはインドを抜き世界最大の委託先となっている。

4. 訪問先の詳細

4-1 デラサール大学

4-1-1 キャンパスの概要

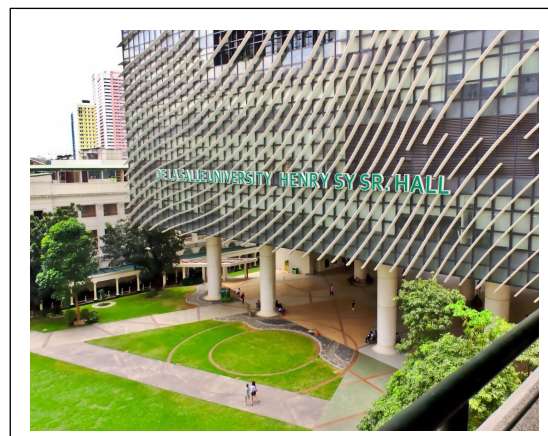
デラサール大学は、1911年に作られたキリスト教カトリックの私立大学である。フィリピンの中でトップレベルの大学であり世界の大学ランキングにも入る大学である。デラサール大学は4つのキャンパスを持っており、その中の1つであるマニラキャンパスに私たちは行った。

マニラキャンパスは、マニラ市の中心部にありとても大きいキャンパスである。学内の施設はとても充実しており、設備も良くキャンパス全体として綺麗な印象をうけた。生徒数は、16000人以上おり男女比は約1対1ほどであり大学全体として華やかな印象を受けた。

また、キャンパス内では研究施設だけでなく飲食店やカフェテリアなど学生が快適に過ごしやすいように工夫されており過ごしやすさを感じた。セキュリティー面でも学外から入るときは必ず荷物検査がありとても安心できる場所であった。中庭にはネコがたくさんおりのどかな雰囲気がありなおかつ建物は近代的な印象がありとても良かった。



図① 大学内からとったマニラの様子



図② デラサール大学の外観



図③ 大学内のレストランの様子



図④ 大学内のカフェテリアの様子

4-1-2 講義の内容

初めは、デラサール大学の生徒たちの数学の授業を、一緒に受けさせてもらった。フィリピンの生徒たちは授業中先生の質問に対して誰が手を挙げるとかはなく、全員が答えていて日本とは全然違った。授業中に他のことをしている人はおらず、みんなが積極的に受けている印象をうけた。

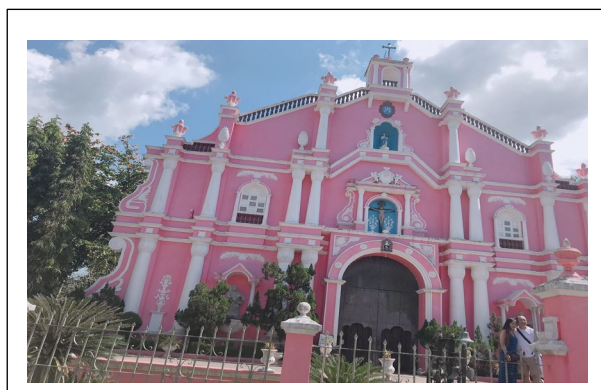
次に英語クラスの授業をうけた。英語クラスの授業では座って板書を取るという形ではなく先生から与えられた課題を考え全員が発表するという積極的に参加させる授業であった。授業内では、英語を積極的に自分たちに使わせていて、日常会話でつかえる英語をたくさん教えてもらい良いものとなった。発表の時も私たちの発表に対して必ず先生が質問をしてきて、考えた英文をいうだけでなく自然に英語が出るように鍛えてもらった。

英語クラスの最終日には、VILLA Escudero というフィリピンの美術館と遊園地が両方楽しめる場所に、連れて行ってもらいました。

フィリピンの歴史を学びつつ係員の人たちには英語を使い、自分たちで話しとても勉強になった。



図⑤ 数学の授業を受けた後の自己紹介



図⑥ VILLA Escudero の美術館

4-1-3 学生交流

今回はデラサール大学で日本研究会というサークルの人たちと交流させてもらった。交流会を開いてもらい、フィリピンのゲームを教えてもらいとても楽しんだ。また日本語研究会の人たちは日本文化についてとても興味を持っていていろいろと話しながら日本に対する印象やフィリピンのことを詳しく教えてもらった。交流会の時だけでなく他の日にも夜ご飯に連れていってもらい、フィリピンのオススメのレストランやおもしろい食べ物を教えてもらうなど交流を深め、仲良くなれた。今度日本に来る人も数名おり日本でも交流を続けたいと思っている。



図⑦ 日本研究会の学生との記念撮影

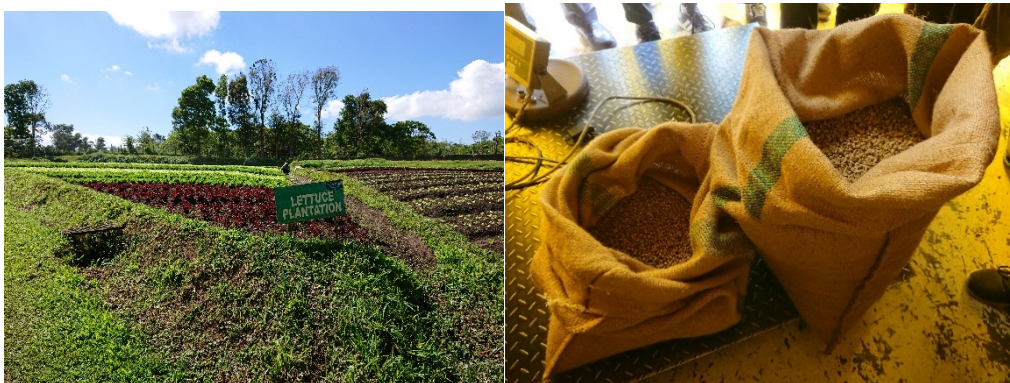
4-2. タガイタイ(Tagaytay)

4-2-1. 概要

タガイタイとは、マニラ都市部から南部へ約 64km、カビテ州の標高 700mの高地一帯を指し示す。標高が高いことから、マニラに比べて気温は低く、避暑地としての人気が高い場所である。

4-2-2. オーガニック農場(Gourmet Farms)

マニラ都心部からタガイタイに行く道中のカビテにある農場を訪れた。ハーブやスパイス、野菜、コーヒーなどを栽培している。また栽培だけでなく、作物の加工もしている。コーヒーは焙煎までしている。農場の敷地内にあるレストランでは、この農場で採れた野菜のサラダを食べたりコーヒーを飲んだりできる。



4-2-3. 展望台(People's Park)

入場口で入場料を支払い、少し急な坂道を上ると展望台がある。ここはタガイタイの中でも最も標高が高い地点で、自然豊かな景色を一望することができる。タール湖やタ

ール火山はとても美しく、また、私たちがこの後行くことになる遊園地スカイランチの姿も見ることができた。頂上にはキリスト像があり、フィリピンがカトリック教徒の多い国であることを感じさせる。



4-2-4. 市場(Mahogany Market)

昼食をとった市場は地元の人が利用する市場だった。屋台でローカルな食べ物を食べることができた。マーケットでは豚肉が丸ごと売られていて驚いた。バナナやマンゴーといった日本でもおなじみなフルーツも多く売っていて、店先で店員さんが切り分けて食べさせてくれた。



4-2-5. 遊園地(Sky Ranch)

最後に訪れたのは遊園地だった。入場料をはらい、加えて乗り物に乗るときにチケットを購入するタイプの遊園地だった。ジェットコースターやバイキングなどのアトラクションの他、タール湖を眺めるジップラインや、景品を競うダーツなどのゲームも楽しめた。ポニーの乗馬もできた。



4-3. イントラムロス

4-3-1. 概要

イントラムロスとは、スペイン語で高い壁に囲まれた町を意味する言葉です。その名の通り、昔は高さ約 5m の壁に囲まれた市街地になっていました。マニラの北西部に位置し、周囲 4.5 km、敷地面積 62ha の城塞都市を当時の技術で作ったことを考えると、その技術力のすごさに驚きます。16 世紀ごろフィリピンがスペインの植民地となっていた時にスペイン人によって造られ、当時はスペイン軍の要塞として使われていました。その後、スペインから独立するもアメリカに統治され、第二次世界大戦では日本に一時的に占拠されるなど様々な国の影響を受けたこの要塞は、第二次世界大戦の戦渦の中、大半の壁や建物が崩壊しました。しかしその跡地は今ではマニラの主要な観光スポットになっており、国も歴史的価値を残すため昔の建物の復元に力を入れています。そんな努力もあって、近年発展してきた現代的なマニラの街並みの中に突如として現れる歴史的景観は、まるで異空間に入ってしまったかのような気持ちにさせてくれます。また、博物館や美術館も充実しているので、フィリピンの歴史を知るにはうってつけの場所と言えるでしょう。首都マニラに来た際はぜひ立ち寄ってみてください。



図.4.3.1 所在地

4-3-2. フォート・サントイエゴ

フォート・サントイエゴは、イントラムロスの中でも主に軍事用に使われていた施設です。地下牢や大砲の跡が今でも見られ、当時の状況が色濃く残っています。この地下牢は日本軍が占領した時に使われたとみられていて、日本軍によって死に至らしめられた約 600 人の犠牲者が地下深くに眠っています。地下牢のそばの看板には、「この残酷な仕打ちを受けた記憶は、永遠にフィリピン人の心の中で生き続けるだろう」と書かれており、今は友好関係にあるフィリピンの中にも日本人をあまりよく思っていない人たちも少なからずいるのだということを痛感させられました。



図.4.3.2 正面



図.4.3.2 地下牢跡

また、フォート・サントイエゴの中にはホセ・リサル博物館があります。ホセ・リサルはフィリピン人ならだれでも知っているような国民的英雄で、スペイン統治からの独立

運動に大きく貢献し、革命の引き金になった人物として讃えられています。彼は、何度も海外渡航を繰り返す中で、植民地支配されているフィリピンの現状に疑問を抱くようになり、スペイン統治に対して抵抗運動を行いました。しかし、活動が大きくなるとスペイン政府もこれの弾圧に乗り出し、リサールは捕らえられてしまいます。そして、死刑が言い渡されたリサールがたどった道には、リサールの足跡が書かれています。これを見ると、本当にリサールの死刑を悲しんでいた国民の気持ちが伝わってくるようでした。



図.4.3.2 リサール像



図.4.3.2 リサールが入れられた牢屋



図.4.3.2 足跡

4-3-3. マニラ大聖堂

マニラ大聖堂は、フィリピンの中で最も重要な教会であり、国民全体の 83%にも及ぶカトリック信者の中心地になっています。1981 年と 2015 年にはローマ法皇も訪れており、由緒正しき場所として現在も教会として使われています。また、この建物は、長い歴史の中で幾度も戦禍に巻き込まれながらもそのたびに再建されて今に至ることからフィリピンの不屈の象徴とされています。私たちは、今回マニラ大聖堂の中を見て回れる時間が少なかったのですが、見ることはできなかったのですが、マニラ大聖堂の中には 4500 本ものパイプを使ったアジアで最大のパイプオルガンが設置されています。



図.4.3.3 教会内部①

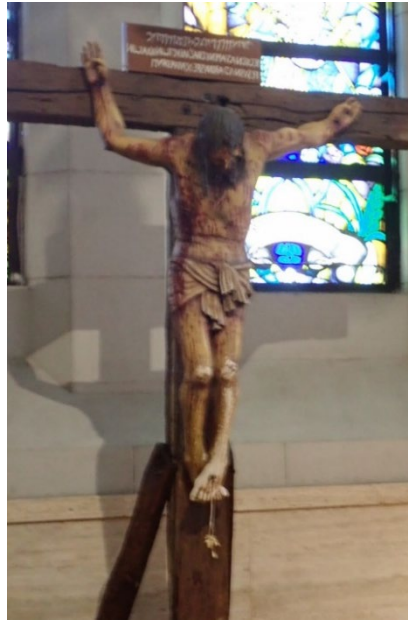


図.4.3.3 教会内部②



図.4.3.3 教会内部③

4-3-4. サン・アウグスティン教会

サン・アウグスティン教会はフィリピンで最も古い教会で、1571年に建てられました。それ以降イントラムロスは何度も戦禍に見舞われましたが、この教会はそれらの被害を免れた唯一の建物で、その歴史的価値から1993年には世界遺産に登録されました。教会の中には、美術館になっていて様々なものが展示されています。実際に中に入るとき、まず目につくのが入り口の扉に書かれたハートのデザインです。これは、この教会の名前の由来となっている、創始者の聖アウグスティンが一番伝えなかったメッセージである『愛』を想起させ

るデザインになっています。アウグスティンは、イエスの思想をもとに『隣人愛』を説き、お互いに愛し合い協調性をもって共生していくという考えをフィリピンの中に根付かせることに成功しました。中に入るとすぐに広々とした教会が見えます。その天井には立体的に見えるだまし絵が描かれており、下から見るととても入り組んだ構造をした天井に見えます。



図.4.3.4 入口



図.4.3.4 教会内部①



図.4.3.4 ドアのハート

また、連結している隣の建物は、当時は修道院だったそうですが今は美術館になっていて、当時使われたものやそれを再現したものが展示されています。修道院は真ん中に中庭がある造りになっていて、修道女たちの健康を保つための日光浴の場として使われていたそうです。他にもフィリピンに強い影響力を与えたスペインやアメリカ、中国に日本といった国の文化が感じられるデザインや家具が多くみられるのが特徴です。

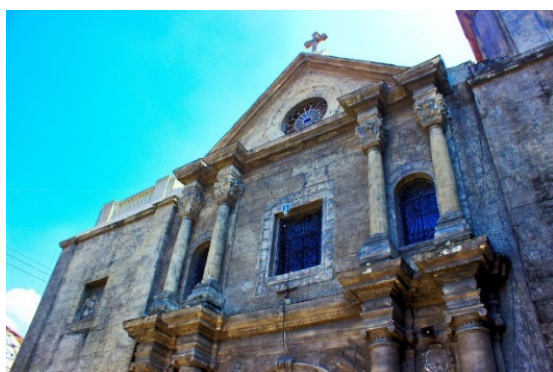


図.4.3.4 外観

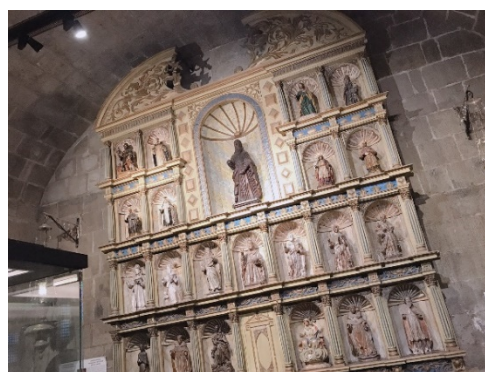


図.4.3.4 教会内部②



図.4.3.4 レンガ模様の天井



図.4.3.4 障子

4-4. JICA

4-4-1. JICA の概要

JICA とは、Japan International Cooperation Agency（独立行政法人国際協力機構）の略であり、平成 15 年 10 月 1 日に設立され、日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施期間として、開発途上国への国際協力を行なってきた。2018 年 3 月末時点で 8 兆 998 億円の資本金、1909 人の常勤職員で、国内約 15 の拠点と海外約 95 カ国に拠点を設け活動を行なっている。

4-4-2. JICA フィリピン事務所の概要

日本にとってフィリピンは有数の ODA 受取国であり、フィリピンにとっても日本は最大の ODA 供与国となっている。フィリピンの近年の経済成長に伴う財政負担能力の向上も踏まえ、無償資金の協力は分野を絞り込み、円借款及び技術協力を中心として実施されている。2017 年 1 月、5 年間で官民併せて 1 兆円規模の支援を行うことを発表した。

<基本方針>

「包括的な成長、強靱性を備えた高信頼社会及び競争力のある経済知識」の実現に向けた協力の実施

<重点分野>

(1) 持続的経済成長のための基盤の強化

- ・ 持続的経済成長に向けた質の高いインフラ整備
- ・ 産業振興・行政能力向上

- ・治安・テロ対策等を通じた法執行能力強化
- (2)包摂的な成長のための人間の安全保障の確保
 - ・災害リスク軽減・管理
 - ・農業生産性向上・高付加価値化
 - ・セーフティネットの整備
- (3)ミンダナオにおける平和と開発

4-4-3. 具体的な活動内容

1. 科学的根拠に基づく薬物依存症治療プログラム導入プロジェクト（2017~2022 年）
2016 年に就任したドゥテルテ大統領が最優先課題として取り組んでいるのが違法薬物対策であり、取締りの強化により 100 万人以上が自主し治療を求めている。施設への入所者の急増により、治療の提供が十分になされていない状況が続いているため、施設の整備・支援に取り組んでいる。
2. フィリピン初の地下鉄整備による首都マニラの交通渋滞の緩和（2018~2025 年）
2018 年 3 月、1,045 億 3,000 万円を限度とする円借款貸付契約に調印した。この事業は、マニラ首都圏において、北部ケソン市と南部パラニャケ市を結ぶ、フィリピンで初となる地下鉄（地下 13 駅、約 25km）を整備することで、マニラ首都圏の深刻な交通渋滞の緩和に寄与するものである。

4-4-4. 今回の訪問先 RITM(Research Institute for Tropical Medicine)について

RITM とは熱帯医学研究所のことであり、現在はフィリピンにおいて 3 件目の感染症分野の SATREPS プロジェクトが行われている。それが「フィリピンにおける狂犬病排除に向けたワンヘルス・アプローチ予防・治療ネットワークモデル構築プロジェクト」である。2018 年 10 月からの 5 年間で研究費 5 億円のプロジェクトであり、現在は 2 人（医者・獣医）の日本人研究者が駐在している。

<フィリピンにおける狂犬病の現状>

狂犬病は発症すればほぼ 100%死亡するウイルス性人獣共通感染症である。フィリピンでは年間 200~300 人が死亡しており、狂犬病が公衆衛生上の重要な問題として捉えられている世界上位 10 か国のひとつとされている。

<SATREPS プロジェクトとは>

JICA と JST（国立研究開発法人科学技術振興機構）が共同で実施しており、開発途上国の研究者が共同で研究を行う 3~5 年の研究プログラムである。日本の研究者は自ら申し込みプロジェクトに参加する。環境や防災、感染症など様々な分野に取り組んでいる。

<現在行われている取り組み内容>

- ・洞毛を用いたイヌの狂犬病診断法の開発

これまでは狂犬病を診断するために犬の脳を使用していたが、衛生面や診断の簡易化を考慮し、洞毛のみを用いてできるような診断法の開発を行なっている。

- ・ワンヘルス・アプローチ狂犬病予防・治療ネットワークモデルの作成

各地域の狂犬病に関するデータを診断後すぐに共有することで、狂犬病撲滅の対策活動の強化へつなげる。

<建物の紹介>



<世界銀行が作った結核の研究所>

日本が建築を担当



<エボラ出血熱の研究所>

中の空気は除菌されてから外に出される

<質疑応答>

Q.RITM ではどの国から来る研究者が一番多いか？

A.アメリカの研究者が一番多い

Q.なぜフィリピンでの狂犬病はなかなか減らないのか？

A. ワクチン普及率が低いことと人口過密が極度であることが主な原因。経済は発展してきてはいるが、格差が広がるだけで下の方の層は変わらない。

Q.隣接している病院に訪れる患者さんの中で何の病気が一番多いのか？

A.デング熱が一番多い。1日に訪れる約 1500 人の患者のうち 400 人がデング熱。

Q.デング熱の対策はどうしているのか？

A.フィリピンで初めてデング熱のワクチンを取り入れた。しかしその後に亡くなった子供のことを母親たちはワクチンが原因だと思ってしまい、ワクチンを打たなくなってしまった。このようなことが影響して接種率が激減している。

4-5. 千代田化工建設グループ

4-5-1. 千代田化工建設株式会社の概要

千代田化工建設株式は神奈川県横浜市に本社を置く企業で、1948年に設立され現在多くの国々で、石油・天然ガスなどのエネルギー、化学・石油化学、医薬品、環境技術、再生可能エネルギー、産業設備などの分野で数々のプラントを建設しプロジェクトを遂行してきた。今までに全世界のLNGの生産能力の40%を設計・建設した。

海外拠点は20カ所以上あり、60以上の国々でプロジェクトを遂行してきた。今回のフィリピン短期派遣プログラムでお世話になった Chiyoda Philippines Corporation もそのうちの設計拠点のひとつ。現在の従業員はおよそ6200人、売上は毎年約5000億円で、アメリカ・オーストラリアなどで大きな売上をあげている。

また千代田化工建設は、CSR(社会的責任)にも積極的に取り組んでいる企業で「エネルギーと環境の調和」を経営理念に掲げ事業を遂行している。

4-5-2. Chiyoda Philippines Corporation (CPh)

CPhは1995年にC&E Corporationという名前でフィリピンのEEIとChiyoda Corporationの産業建設能力および製造の専門知識を統合した合併会社として設立された。2006年にChiyoda Corporationが株式を100%所有することになり、現在のChiyoda Philippines Corporationになった。CPhの従業員は900人ほどで、主にガス処理、石油精製、石油化学プラントおよび様々なプラント施設のエンジニアリング、調達支援、プロジェクト管理、コンサルティング、建設支援、フィールドエンジニアリングなどの事業を行っている。

CPhでは、顧客満足のためには従業員の安全や満足が重要と考えており、CPhの従業員の方も多くのことを学べるような充実した内容のトレーニングが実施されていると言っていた。また、CPhも千代田化工建設と同じようにCSRに積極的に取り組んでおり、環境保全・地域事業の活性化などに貢献している。

4-6. MHPS GSC

(Web掲載の許可が頂けていないため、Web掲載版では内容を削除しています。)

4-7. Ebara

4-7-1. 荏原製作所

荏原製作所は東京都大田区に本社を置く企業で、インフラや産業用装置、設備を設計・製造している。東証一部上場企業で、風水力事業、環境事業、精密・電子事業をしている。1912年11月に創業され、現在の従業員はグループ全体で約17000人、連結売上高は毎年約5000億円である。連結売上高の内50%以上は海外での売上が占めている。事業の拡大・利益率の向上を実現するため、製品納入後のサービス&サポート事業（アフターサービス）、IoT・AI・ロボティクスの導入拡大などを進めている。グローバルに存在感を発揮する世界トップクラスの産業機器メーカーとなるため、サービスにも力を入れ、グローバルに事業を展開している。

4-7-2. Ebara Pumps Philippines, Inc. (EPPI)

EPPIは荏原製作所の完全子会社で、1991年3月にEbara Benguet, Inc.という名前でステンレス鋳物製造のパイオニアとして設立された会社。EPPIの工場および本社は、私たちが泊まったマニラのホテルから南西に約50km、車で一時間ほどのCanlubangという大きな工業団地にある。ステンレス鋳造物の製造、フィリピンにおける標準ポンプの販売・アフターサービスを行なっている。最近では、後者のポンプの販売・アフターサービスが売上を伸ばしてきている。フィリピンでは日本での販売と違い、代理店が製品の販売・アフターサービスをするのではなく、EPPIが製造、販売、アフターサービスをしている。社長によると4・5年で荏原製作所は積極的に海外進出するようになり、日本人の2人の社員の方はグローバル人材という形でフィリピンで働いている。EPPIでは主にSCS13・SCS14というステンレスをもとにポンプを作っているが、ステンレスは加工が難しい素材で欠陥が多い。EPPIでは、その欠陥の発生率を下げる事が大きな目標になっている。今までにEPPIが販売した製品で一番大きな物は、約500万ペソのポンプでマニラの洪水・水害対策に使われている。

4-7-3. Ebara Pumps Philippines, Inc. を訪問して

フィリピン滞在7日目の3月6日に私たちはEPPIに赴いた。時間に余裕を持って出発したため、EPPIには、予定されていた時間の随分前に到着してしまったが、すぐに応接室のようなところに案内してくれて見学なども予定時間前に始めてくれた。最初にEPPIを紹介してくれた千代田化工の方々との自己紹介や質問をする時間があり、次に、EPPIの社長によるフィリピン・荏原製作所・EPPIについてのプレゼンを聴き、そのあとで質問をする時間をいただき、その後オフィスや工場を見学させてもらった。見学中もその都

度、質問していいという事でいろいろな質問に答えてくれた。工場では、ポンプの型を作るところから、型に熱した金属を流し込むところ、型を砕いて中身を取り出すところ、仕上げをするところなどを近い距離から見せてもらい、なかなか迫力があるものだった。印象としては、工場内には作業する人がいっぱいいて、あまり工場の自動化はしていないと感じた。2時間ほどの訪問だったがたくさんのお話を聞く事ができ、充実したものとなった。

4-8. フィリピン工科大学

4-8-1. 概要

フィリピン工科大学は1901年に創立した公立の大学（州立大学）である。マニラキャンパスはマニラの大学密集地域に位置し、近くには公園や国立博物館もあり文化的な地域であることがうかがえた。

また、フィリピン工科大学という名前の通り、工業系に特化した大学であり、文系の学部や医学部は存在せず、工業系の学部を中心に16個の学部が存在する。この点は東工大と類似している。

ただ、東工大よりも女性が多く、男女比はほぼ1:1であるような印象を受けた。我々はバンに乗ってフィリピン工科大に行き、学生との交流会に参加した。残念ながら十分な時間がなかったので、キャンパスの見学はできなかったが交流会では多くの学生と交流することができた。

また、この交流会を通して知ったことだが、フィリピン工科大はISO（国際標準化機構、スイスに本部を置く非営利団体）の認定を受けているために学生の授業料が無償化されている。以前は大学だけでなく日本でいうところの高校に当たる学校もあったが多くの学生を許容できるだけの教室がないということで高校はなくなってしまったらしい。

また、私たちが交流会を行った建物の目の前にはアリーナのような施設があり、学生たちがバスケットボールをしていた。ここでもフィリピンで最も人気のスポーツがバスケットボールであるのだとうかがい知ることができた。

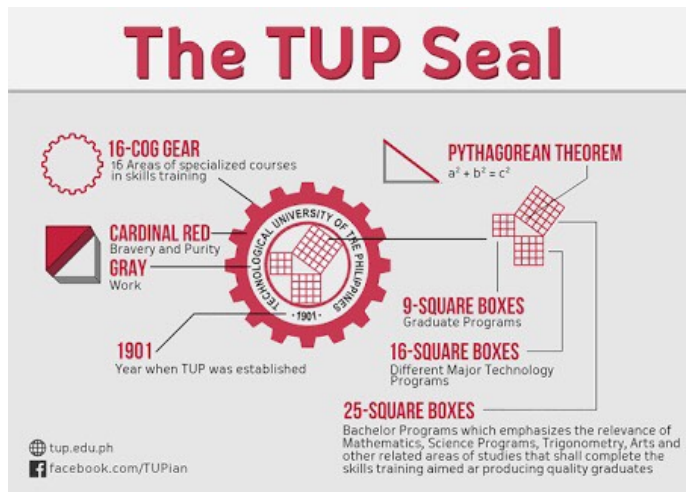


図 1 フィリピン工科大のロゴ

4-8-2. 学生

この大学に来てまず驚いたことは学生が制服を着ていることである。制服の仕組みもし変わったもので水曜日と土曜日以外は必ず白のポロシャツを着なければならず、その一方で水曜日と土曜日は各学部によって指定された色（私たちが交流した土木工学の学生は赤）のシャツか白のシャツを着ればよいという仕組みだった。大学に制服があること自体日本では珍しいものであったがそれが曜日によって変わるというのは日本では全く聞いたことのない話であり新鮮だった。

学生は私立大学のデラサール大学と比べるとやはり庶民的な学生が多い印象を受けた。実家はマニラ市ではなく隣の市にあり一人暮らしをしているという人もいた。中には隣の市にある実家からバスで通学しているという人もいたが、通学に、5時間以上かかる人もいることは衝撃的であった。こういった話を聞いて、交通インフラの整備や鉄道網の拡張の必要性を強く感じた。そしてこの現状が現在この国で土木工学が必要とされている要因なのだろうと思った。また、院までは進まずに大学卒業後には就職する人が多かった。

そして、卒業の仕組みも日本とは違うようだった。詳しくは聞けなかったが、今月卒業するという人がいる一方で来月卒業の学生もいて卒業のタイミングがまちまちであったことには驚いた。また、卒業後はそのまま就職するのではなく、まず国家資格を取るための試験を受けてから社会に出ていくらしい。そして、日本や韓国、中国などの英語圏でない国で働く場合にはさらに別の試験を受ける必要もあるらしく、卒業してから働くまでの間に様々な試験があるのは非常に興味深かった。

また、学部ごとに高校の生徒会のようなものが存在して様々なイベントの企画、運営を行っていることも新鮮だった。今回の歓迎会もその生徒会のような団体の運営の下で成り立っていたらしい。



図 2 フィリピン工科大学の様子

4-8-3. 交流会

土木工学専攻のフィリピン工科大の学生と交流会を行った。交流会では様々なアイスブレイクを用意してくれていて、プレゼンの後アイスブレイクといった具合でテンポの良い進行で、すぐに打ち解けていくことができた。

また、日本について興味を持ってくれる学生が多かった。そして、ほとんどの人が日本のアニメが好きで中には私たちよりも日本のアニメについて詳しい人もいた。

また、通学にかかる時間など日本と違うところをたくさん知れたのも今回の交流会を通して得られた貴重な経験となった。例えば、ある学生はバスに乗って通学していた時に銃で脅されてスマートフォンを強奪されたことがあったらしい。このような身近に潜む危険性は実際にマニラで暮らしている人の話を聞くことでしか得られない情報なので交流会で聞いたフィリピンの日常に関する話は非常にためになるものであった。

仲良くなった学生と SNS のアカウントを交換することになった時に気づいたことだが、日本では現在 Twitter やインスタグラムが主流でフェイスブックはそれほど一般的ではないのに対してフィリピンでは正反対であった。そのため、フェイスブックのアカウントは持っておいた方がいいな、と感じた。

また何度も繰り返しても丁寧に説明しなおしてくれたり、逆に私のつたない英語を懸命に聞いてくれたり現地の学生は優しく、すぐに打ち解けることができた。中には英語がそこまで得意でない様子の学生もいたが、フィリピン工科大では学内で用いられる言語もタガログ語（英語とともに採用されているフィリピンの公用語）で英語に触れる機会がほとんどない学生もいるらしくそのためであろう。また、フィリピン工科大では留学プログラムが存在せず、院まで行っても外国へ行く留学プログラムしかなく外国人学生を迎え入れるプログラムがないことは驚きだった。



図 3 交流会の様子

5. その他

5-1. 食事

フィリピンは古くからアジアの貿易の中心地であったこと、また、スペインに統治されていた背景をもつことから、料理にも様々な国の影響が見られる。また、他の東南アジア諸国と異なり、統一国家が形成されなかったために宮廷料理が存在しない。スペインからの西洋的な食事スタイル(テーブルとイスを使用する習慣、カトリックの行事で出される特別な料理など)は主にフィリピンの上流階級に受け入れられ、主に中国などとの交易によって伝わった食文化は庶民に浸透した。また、第二次世界大戦後にはアメリカによりファストフードがもたらされた。その際にアメリカから持ち込まれた物の一つにケチャップがあり、フィリピンではバナナケチャップという、バナナを赤く着色した甘いケチャップが通常のケチャップと同様に浸透している。



図 1. フィリピンのレストランで提供されていたバナナケチャップ

また、一般にフィリピン料理は甘く、脂っぽいと言われており、これはスペインからラードやオリーブオイルを用いる料理方法がもたらされたことに起因する。また、フィリピンの複数の地域で食べられている、いわゆる国民食と呼ばれるものの多くはスペイン統治時代には成立したものであり、スペイン風の名前が付けられている。



図2. スペイン語で豚の丸焼きを意味するレチョン

中国からの影響としては主に麺類が挙げられる。フィリピン料理にはパンシット・カント
ンという麺料理が存在し、中国からの入植者たちによってもたらされたとされている。しか
し、広東料理にはこれに相当する料理は存在せず、またフィリピン料理では中華鍋が時折使
用されるがその使用方法も中国のそれとは異なる。



図 3. フィリピン風焼きそば パンシット・カントン

5-2. 町の様子

自分たちが泊まったホテル付近は出店が多く、また比較的貧しそうな子供ややせ細った犬が多い地域でフィリピンの中では所得が少ない人の多い地域のように見られた。そのためその地域にそびえ立つ中流層の生徒が集まるデラサール大学やセンチュリーホテル、SMモールという大型ショッピングモールでは警備員が常に入り口にたち持ち物チェックなどを行っていた。また車で 20 分ほどの一つ隣の町に行けば、打って変わってブランド品が並ぶ高級ショッピングモールがあったり出店はほぼないような地域になる。

フィリピン全体を通して道路状況はあまり良くない。整備されていないものもあるが車がごった返して四六時中渋滞が発生していて、空いている時には車線も守らず猛スピードで駆け抜けていく車も多く見られた。また多くの場所に窓が開いたバスみたいなジプニーやバイクの横にサイドカーをつけたトライシクル(図 1)がそこら中に走っている。現地人曰くものを取られたりする危険性があるため使用は控えるように言われていた。



ジプニーとトライシクル(図 1)



ホテル近くの町の様子(図 2)

6. 所感

<電気電子系・修士課程 1 年>

10 日間という短い期間ではあったが、多くのことを考えさせられた、非常に有意義な時間であったと感じる。私自身フィリピンという国に訪れたのは初めてで、渡航する前の印象としては、漠然と発展途上国なのだろうと予想していた。しかし、マニラに滞在してみて感じたことは、一部地域は先進国の街並みと変わらず、日本の都心のような雰囲気地域さえあり、発展途上国に対する認識も変わった。発展途上国と呼ばれる地域に明確な定義はなく、国際連合や世界銀行などのそれぞれ独自の基準に依存している。一般的にフィリピンは発展途上国と呼ばれているが、先進国と発展途上国との中間に位置するような状態であるように感じた。では、どうやったら先進国と呼ばれるまでに発展できるのだろうか。その条件として、マニラに滞在してみて感じたことが二つある。

一つは道路の整備を含む公共交通機関の充実度である。週末はおろか、通勤時間は昼夜間

わず渋滞している。自動車で 15 分程度の距離に 1 時間以上かけることが当たり前だった。これはフィリピン国内でも重要な社会課題とされており、渋滞により経済停滞に大きな影響が出ているという統計も存在する。その状態を実際に体験して、非常に非効率的だと感じ、なぜ地下鉄や鉄道を充実させないのかという疑問を抱いた。JICA の職員の方に尋ねたところ、経済的に潤沢でない国家にとっては、地下鉄などを敷設することはそう簡単ではないと言われ、納得した。ただ、JICA 主導の地下鉄のプロジェクトがすでに締結しているらしく、今後の動向に期待したい。

もう一つは貧富の格差である。現在貧富の格差は世界的に問題とされており、日本でも貧富の格差によって人生が左右されるというニュースが取りざたされている。しかし、発展途上国に比べれば、先進国における貧富の格差はそこまで大きくないと感じた。なぜなら、例えば日本においては、衣食住に関する最低限度の生活は保障されているからだ。しかし、フィリピンのような国ではその保障はなく、路上生活者やストリートチルドレンが目立っていた。そのような層の人々や地域が犯罪の温床になるのだろうと感じ、治安の改善や国家としての発展を考えたとき、いかに国民の生活レベルを底上げするかが重要なのではないかと考えた。しかし、実際にそれを実行するとなると、一朝一夕に解決できる問題でもない。ユニカセレストランの方々のように、少しずつ社会を支えていくしかないのだろうか。非常に難しい問題だと感じた。

<材料系・学士課程 3 年>

今回のフィリピン超短期派遣プログラムは、私にとって、「フィリピンという国を知る」、「自分の英語力を知る」という 2 点において非常に有意義であったと思う。

「フィリピンを知る」に関しては、まず各自がフィリピンについて調べ、事前学習を行った。事前学習では、英語で発表を行ったため、日本語のみでなく英語でも文献検索をした。そのため、よい英語の練習になり、さらにフィリピンの公用語は英語であるためにより現地の人々の声を聞くことができたのではないと思う。また、滞在中、フィリピンの街の様子を感じることができただけでなく、多くの学生や教授、フィリピンに働きに来ている日本人など、様々な人にフィリピンについての話を聞いたり、質問をしたりする機会を得ることができた。普段日本にいる時は授業中などに積極的に質問をする性格ではないが、いつもと違う環境と少しでも多くのことを知りたいという好奇心のおかげで、恥ずかしさを打破って発言をすることができたのではないと思う。

「自分の英語力を知る」に関しては、フィリピンで新しくできた友人たちとの会話の中での意思疎通に苦労する場面が度々あり、自分の実力不足を痛感したのは勿論のこと、今回参加した東工大の学生の多くが 1 年生であったために上級生である自分の、この大学生活を通じての英語、特にスピーキングに関しての成長が貧しいなということを改めて感じた。英語力の向上は一朝一夕にはできないため、今回新しくできた友人たちと定期的にコンタク

トを取り合ったり、学内で開催されている留学生との交流イベントへの参加や留学生向けの授業の履修をしたりして、今後もこの英語力への危機感を忘れずに努力を続けていきたい。

<経営工学系・学士過程3年>

今回は私にとって初めての留学だった。海外旅行の経験は2度あったが、留学ということにより英語を実践的に使えたらと思っていた。今回のプログラムの中でも、現地の学生さんとの会話が何よりの英会話の練習になった。その中でやはり自分のリスニング力の低さを感じた。せっかく話を振ってくれていても、英語を話すスピードが速かったり、その人その人の訛りがあり聞き取れなかったり、話が噛み合わなかったりしてしまった。それでも現地の人はゆっくり話してくれたり、他の言い回しに変えてくれたりとても丁寧に接してくれた。そのおかげで何とかリスニング力の低さをカバーしながら楽しく交流することができた。もっと自分のリスニング力を磨いて、スムーズに会話できるようになりたいと思った。

そして初めて、発展途上国として位置付けられているフィリピンを訪れてみて、強く思ったのが貧富の差である。デラサール大学などに通っている学生は基本的に裕福な家庭の人が多かったが、一方でホテルから大学までの道中では不法屋台が立ち並んでいて、ホテルの大通りとは逆側には古くて壊れそうな家が密集しているところもあった。また、マニラから南に進んでいけばあつという間に観光地となり、同じフィリピン国内でも場所によって差が激しいと感じた。また、JICA を訪問した際には、経済発展が進んできてはいるものの低い層は変わっておらず、ワクチンの接種率が上がらないことが原因で感染症の削減が進んでいないということも分かった。これからも発展を続けていく中で、どのように下の層にも利益が及ぶようにするかが今後の大きな課題だと思う。難しい課題ではあると思うが、フィリピン全体がより豊かになるよう願っているし、経済を学ぶ学生としてこのような問題に関するニュースなどにより関心を向けていきたいと思った。

最後にフィリピンに来てとても意外だったことがある。それは思っていたよりもずっと社会で活躍している女性が多いということだ。今回訪れた企業はいずれもオフィスで多くの女性が働いていて、会社についての説明を全て日本語で行なってくれた方もいた。発展途上国というと、女性の社会進出が遅れているイメージがあったが、フィリピンでは女性も男性と同様に社会で活躍していると分かり、とても嬉しく思った。そう考えると、日本は先進国であるにもかかわらず、いまだに女性が活躍できていないように思った。他の発展途上国においても、女性が活躍できる機会が増えていけばいいなと思う。

9泊10日という短い期間の留学だったが、思っていた以上に多くのことを感じ、得ることができた。次は1ヶ月以上の留学に挑戦してみたいと思う。最後に、引率してくださった山下先生、エデン先生、そしてサポートしてくださった柳さんに感謝申し上げたい。

<経営工学系・学士課程2年>

今回のフィリピン超短期派遣は、10日間という短い期間だったが、日本にいただけではできないような色々な体験をすることができた。フィリピンでの10日間、現地の学生や企業・農園の方などの多くの人との交流は、旅行ではなかなか経験することができないもので、私の将来に向けて充実した、とても良い経験になった。以下、所感として特に印象に残っていることを書いていこうと思う。

まず、一番印象に残っているのはデラサール大学、フィリピン工科大学との学生との交流が楽しかった事で、プレゼンや簡単なゲーム、ディナーを通じて大学での勉強のこと、政治のこと、普段の生活のこと、タガログ語、流行などフィリピンについて多くのことを教えてもらった。また、日本に興味を持ってくれている学生が多く、日本のアニメや漫画、音楽について話す事が出来た。また、東工大についても少し紹介することができた。ただ、英語が聞き取れなかったり、うまく伝えたい事を話す事が出来なかったりしたので、もっと英語を喋れるようにしておきたかった。

ただ、それでもフィリピンの人たちは、一生懸命話を理解してくれようとしてくれたおかげで、ボディランゲージや日本語、簡単な英語でもある程度コミュニケーションをとる事ができ、フィリピンの学生との交流はとても楽しく充実した経験だった。

一方で、貧富の格差や治安の悪さも印象的だった。

私自身は、貧富の差がある事が悪い事だと考えているわけでは無かったが、フィリピンでは、自分の予想を超える、とんでもない金持ちの人がいっぱいいる一方で、全くお金がなく、チャンスが与えられることもなく貧しい生活をせざるをえない人たちもいっぱいいて、比較的貧しい人たちにも、ある程度チャンスがあるような日本は、良い国かもしれないと感じた。治安の悪さという点では、泊まったホテルの近くで、人が痙攣して倒れていたり、子供につきまとわれてものを奪われそうになったりして、そういった点では、怖い国だと感じた。

最後に、今回のプログラムでは、本当に貴重な体験ができたと思う。海外に対する関心が強まり、フィリピン・日本について再認識する事が出来た。また、英語でのコミュニケーション能力を高める事が出来た。具体的に、どう成長したかはわからないが、このプログラムを通じて成長する事が出来たと思う。

<物理学系・学士過程2年>

海外に行くのは今回が二回目でした。一回目は数日の旅行であり英語を話さずに行けたのですが今回は英語が必須であり日常生活が送れるのかがだいぶ不安でしたがなんとかなるものですね。今回一番の思い出というか得られたものは現地の学生との交流でたくさん英語を話す機会が得られたし、フィリピンに関しての知識やフィリピン人から見た日本

の印象をたくさん聞くことができ自分的には視野が広がっていろいろな観点を持つことができたのかなと思います。この体験は旅行とかではできず、まさにこういった留学プログラムでしかできない体験なのかなと思います。フィリピンという都市はとにかく暑い。それはともかく貧富の差をすごく感じました。出店があつて周辺でボロボロに衣服をまとった人たちがいれば、ブランド品を持ち歩くような高級層もいて想像より差がすごかったので驚きました。何十年後かには少しでも差がなくなっていればいいなと思います。

一番いいところはやはり物価が低いところです。スーパーでお酒ひとつ買う時だって日本円で換算したらめっちゃめっちゃ安いと思いながらいろんなものを買いました。そのため自分はもっと滞在してもいいと思ったりもしました。日本にいる時と同じくらいの収入で、フィリピンで暮らせばすごく豊かな暮らしができると思いました。将来的にフィリピン就職も視野に入れていこうと思います(笑)。

今回の留学で出会った現地の学生さんたちとはこれから関係を思っていきたいですし、今回の体験をきっかけにもっとたくさん英語に触れる機会を増やしていこうと思います!フィリピンでお世話になったみなさん、ありがとうございます。

<第4類・学士課程1年>

今回の海外派遣プログラムは私にとって初めての海外渡航で行く前には不安に思う部分もあった。ただ、派遣プログラムを終えた今は行ってよかったと感じている。ここでは今回のプログラムで学んだことを述べていく。

まず英語でのコミュニケーションについて。やはり現地の人と話す中で自分の語彙力の不足や即興で文を作ることの難しさを感じたが、一番大切なことは語彙力がなくても積極的に話しかけていくことだと感じた。交流した学生達も私たちが英語ができないということはわかっているのでわからないことは聞き返せば丁寧に教えてくれたので、話しかけることが大切だと感じた。

次にフィリピンの交通について。フィリピンに行って一番衝撃を受けたのがフィリピンの交通事情だった。ひどいときには30分で行ける道を1時間半かけて行くという話には驚きを隠せなかった。中には通学に5.6時間かけているという人もいてにわかには信じられなかった。このようなフィリピンの交通事情を聞いて鉄道の必要性を感じた。特に鉄道に時刻表の存在がないことや機械メンテの影響で遅れが出るということにも驚き、鉄道網の拡張と整備が必要とされていると思った。また、鉄道網が未発達であるために一般道が車で溢れかえってしまい、上記のような大渋滞が発生してしまうのだと思う。これらの事情から今現在フィリピンで土木工学が必要とされているのだということを実感した。

最後に今後もこのような留学プログラムに参加して国際的な視野を広げていくとともに自分の語学力向上に努めていきたいと思った。また、海外経験を積むという意味では海外旅行もしてみたいとは思ったが、現地の学生との交流ができるという点から海外留学プログ

ラムにより積極的に参加したいと思った。

<第4類・学士過程1年>

私にとって今回のフィリピン超短期派遣プログラムがはじめての海外渡航だった。今まで一度も日本から出たことがなかったので自分の中では日本の常識が全てであり、テレビやネットで海外のことについて見たりしてもいまひとつ実感がわかず、視野を拓げるためにも海外旅行に行きたいと思っており、特に高校の社会科選択で地理を勉強していたときに、近年発展が目覚ましい中国や東南アジアの国々に行ってみたいと強く思うようになった。そんな中で大学のグローバル理工人研修で超短期留学があることを知り、迷わず応募することにした。

しかし私は英語が得意なわけではなくむしろ苦手な方で、特にリスニングが致命的にできなかった。私は現地の人と異文化交流をしたいという気持ちが一番大きかったので英語ができなかったら上手くコミュニケーションを取れないなど不安に陥っていた。もちろん本プログラムには英語研修も含まれており、本プログラム自体の目的が英語力向上であるが、自分の英語力はその土俵にすら立っていないのではないかと思い始めたのである。しかし実際に行ってみると思っていた以上に現地学生らと楽しくコミュニケーションをとることができた。もちろん現地学生が、英語ができない自分たちにわかりやすいようにゆっくりと簡単な英語で話してくれたということもあるが、それでも英語というツールを用いて実際に会話ができたということがとても嬉しかった。自分はリスニングが普通の人よりも苦手なので確かに100%理解することはできなかったし、特に観光中のガイドさんの話はほぼわからなかった。これは今でも悔しいし、もし理解することができていたらもっと楽しめただろうと後悔しているが、10日間という短い期間ではあったが確実にリスニング力は上達したとを感じるし先程も述べたようにある程度現地学生とも英語で会話できたので、この留学を通して英語の重要性の再認識はもちろん、自分の英語力に少し自信を持つことができた。特にスピーキングに関しては思っていた以上に相手に伝えることができたので、今まで勉強してきた英語、つまりよく批判される日本の英語教育も結構スピーキングの面で役に立つのだなとも感じた。

本プログラムを通してますます英語の重要性和楽しさを認識することができたので今度はもっと英語を勉強して、また海外にチャレンジしたいと思う。最後に今回の留学プログラムに関わってくださった皆様、本当にありがとうございました。

<第7類・学士課程1年>

今回の研修は私にとって初の海外経験であったということもあり、多くのことを学ぶことができたと感じている。私がこのプログラムへの参加を決めた理由は主に二つある。一つ

は海外経験を積むこと、もう一つは実践的な英語力を養うことである。以下、私がこの海外派遣プログラムを経て感じたこと、得たことを上記の観点から述べたいと思う。

まず、私がマニラに到着して感じたことは現地の文化や設備は日本とは異なるということである。特に交通に関して、道路上の車線が無視して車が列を成す光景には驚かされた。現地の学生が「フィリピンの唯一の交通ルールは衝突しないこと」と冗談を言うほどに、フィリピンの交通の常識は日本とは異なっていた。また現地の料理は全体的に味付けが濃く感じ、この味の濃い食事を毎食取っているのか、と衝撃を受けた。しかし、これらの違いに順応することにあまり時間はかからなかった。それ以上に私がストレスを感じたことは、歩道が歩きにくいことである。日本ほど整備が行き届いてはいないため、常に気を付けて歩道を歩くことが必要であった。私はこの経験から、いかに日本での生活でストレスフリーであったかということを再認識した。またJICAの施設やユニカセレストランなどでの経験から、いかに日本での生活の水準が高かったかということに気づかされた。

次に、日常のコミュニケーションとして英語を話すことができたことは、私にとって良い経験となったように感じる。これは今までの英語教育というものが単なる机上のものに過ぎず、実際に使われる言語としての実感があまりなかったためである。今回、日常生活や学生交流などの場でこれを実感し、英語学習の重要性に気づくことができたと感じている。

私はこのプログラムでこれらの他にも様々なことを経験し、学ぶことができたと感じている。今回の経験は将来海外留学を志したときのみならず、これからの学校生活の様々な面で活かすことができると確信している。

<第6類・学士課程1年>

今回のプログラムは、私にとって初めての留学経験でした。出国前、不安や緊張といった感情は小さなものではありませんでしたが、実際に入国してみて、これまで心配していたことが吹き飛ぶくらい大変なことがたくさんありました。まず大きな衝撃を受けたのは治安の悪さです。空港に降り立った瞬間から、第六感で身の危険を感じました。私たちが滞在したホテルの付近は、デラサール大学がお金持ちの通う学校だと聞いていたこともあり、きれいな街だと想像していた分、初めて訪れた時の衝撃は大きかったです。街のいたるところで人々の格差を感じ、どうにかならないものかと考えさせられました。また、フィリピンの交通事情も想像以上に悪い状態でした。普段は温厚で優しいフィリピンの人たちが、車に乗ると様子が豹変して荒っぽくなるのは少し不思議でもありました。信号や車線といったルールを守らない車に対して恐ろしい思いをすることもありました。その点を考えると、交通事情は、道路の整備や信号の快適化といったハード面の開発だけでは解決できず、実際にフィリピンで生活をしている人たちの意識を変えろといったソフト面のフォローもなくてはならないと改めて感じました。

個人的に一番印象に残っていることは、食中毒になり病院に行くことになってしまったことです。海外の病院などめったに行くことはありませんから、貴重な体験ができましたが、

とてもつらかったのであまりいい思い出ではありません。ちなみにフィリピンの病院は、中に入って初めに、受付に行き症状を伝え、お医者さんのいる部屋を教えてくださいというものでした。その部屋も診療室というよりは大学の教授の部屋のほうが近い印象でした。食中毒の原因は、きちんと検査をしていないので定かではありませんが、水ではないかと言われました。もちろん気を付けていましたが、一週間以上口にするものすべてに気を遣うのはとてもストレスで、最後のほうでは少し気を緩めてしまったかもしれません。いずれにせよ水環境が整っていないことの深刻さを感じました。また、自身の身の危険を感じ、状態を説明し、助けを求める手段として英語というコミュニケーションツールが必要不可欠であることは身に染みて感じました。

<第4類・学士課程1年>

今回のフィリピン超短期派遣は、私にとって6年ぶりの海外渡航だった。しかし、6年前の家族旅行とは比べ物にならないくらい貴重で充実した10日間になったと思う。というのも、フィリピンから帰ってきてから約1か月が経つが、自分の変化にとっても驚いているからである。渡航前に比べて確実に行動力が増し、小心者だった自分が少し勇気を出せるようになり、また、コミュニケーション能力も向上した。自分でも、なぜこれほど変わることができたのか、10日間を振り返りながら分析してみると、おそらく現地の学生との交流が一番の影響ではないかと思う。

元々今回の超短期派遣では、英語で会話をする機会をなるべく増やして、英語の実践力をつけたいと思っていた。しかし、初日と二日目は機会があったにもかかわらず、フィリピンの人とはほぼしゃべることができなかった。このままじゃまずいと思い、3日目と6日目にあったデラサールの学生との食事に参加したが、結局うまく会話の輪に入ることができなかった。そして、8日目にしてやっとTUPの学生と1対1で15分~20分ほど話すことができて、さらに9日目の夜は12時過ぎまでTUPの学生たちと遊ぶなど、本当に楽しい時間を過ごすことができた。このような経験ができたおかげで、日本に帰ってからは多少のことは気にせずに堂々と自分の意見が言えるようになったし、ミスしてもいいからやってみようという気持ちになれることが多くなった。この変化は、自分の生涯にかけてとても重要なことだと思うので、今回のプログラムに参加して本当に良かったと思う。

また、この体験で他にも意識が変わったことと思うことは、3つほどある。1つ目は貧困地域の支援に対する見方です。ユニカセで聞いた貧困層の子供の話は、私にとってとても衝撃的で初めての体験でした。実際に話してみると、口調や雰囲気からその子がどんな思いをしていたのか、今どんな気持ちでいるのかということが、ひしひしと伝わってくるようでした。それを聞くと、私ができることは何かな、とすこし考えるようになった。2つ目は海外で働くことについてである。今まで、海外勤務は避けたいかなという気持ちだったが、エバラポンプや三菱日立を見学して、海外での仕事もやりがいのありそうな仕事だなと思った。

また、10 日間生活してみて特に不自由に感じたことはなかったので、海外での生活も少し受け入れられるようになった。3 つ目は、勉強に対する意識である。フィリピンでは路上生活者と普通の人々が同じ町の中に混在しているため、日本に比べて生活に対する危機感が違うように感じた。そのため大学に進学した学生の意欲が高く、大学に入ってからまじめに頑張る学生が多いのではないと思う。それを目の当たりにして、私ももっと向上心を持たないといけないと感じた。

このように、多くのことを学べた 10 日間だったので、ぜひ他の学生にもこのプログラムに参加することをお勧めする。

<第 7 類・学士課程 1 年>

自分は初めて海外に行ったのが今回で驚きの連続だった。今まで海外に行きたいと思っ
ていても、1 人で初めていくのは不安だったけど、今回このプログラムのおかげでみんなと
行けてとても良い経験になった。正直フィリピン行く前にフィリピンのことはある程度調
べたが、全然わからなく英語もままならない状態でとても不安だった。でも、いざ行ってみ
るととても楽しく勉強にもなりとても素晴らしい 10 日間になった。私がフィリピンで特に、
印象に残ったことは 3 つある。

1 つ目は、街の様子だ。街中では屋台がとてたくさんありとても安い値段で売られてお
り子供達がとても多くいた。交通面でも電車があまり使われてないので、車がとても多く常
に渋滞に巻き込まれていた。朝早い時間だと車で 15 分の距離が、夜になると 40 分ほどか
かってしまうこともありなにか改善できないかなと感じた。また、歩いていると、子供達が
寄ってきてお金をめぐんでほしいと言ってきたり荷物に手をつけようとしてきたりするこ
ともあり、自分がどれほど恵まれた環境で育っているのか改めて深くわかった。

2 つ目は、デラサール大学での授業の様子です。今実際、東京工業大学で学んでいてフィ
リピンの人たちと授業の学ぶ姿勢がここまで違うものなのかと驚いた。フィリピンの人た
ちは授業を受ける時ずっと積極的に参加していて先生の質問にもすべて全員が答える気で
いて決して手を上げて発言するとかでなく自然と声が聞こえてくる感じだった。また先生
の話の途中でもわからないところがあればすぐその場で聞いていて見習わないといけない
なと思ったし、こういう授業態度を日本でもしないといけないなと感じた。

3 つ目は、フィリピンの学生との交流です。彼らと会話するとき、自分は一回で英語を聞
きとれなく、聞き返してしまうことが多かったが彼らは全く嫌な顔しないで話してくれて
自分の話も聞いてくれた。また一緒に食事に行く時も、フィリピンのことを全然わからない
私たちのために、オススメのところにたくさん連れて行ってくれて彼らのおかげで、フィリ
ピンをとっても堪能することができた。彼らとは本当に仲良くなれて SNS のアカウントを
交換して日本に帰った今でも連絡していて、親しい友達が海外で作れるなんて思いもしな
かったので本当に嬉しく思っている。

今回の超短期派遣では、フィリピンでしか経験できないことをたくさんさせてもらった。これからの自分の人生で、この経験を活かして国際社会に自分が貢献できたらなと思っている。

<参考>

<3. フィリピン概要>

- [1] “Philippines,” [オンライン]. Available: <https://en.wikipedia.org/wiki/Philippines>.
- [2] “フィリピンの国旗,” [オンライン]. Available:
https://en.wikipedia.org/wiki/Flag_of_the_Philippines.
- [3] “Jose Rizal,” [オンライン]. Available:
https://en.wikipedia.org/wiki/Jos%C3%A9_Rizal.
- [4] “ビサヤ諸島,” [オンライン]. Available:
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%93%E3%82%B5%E3%83%A4%E8%AB%B8%E5%B3%B6>.
- [5] “Quezon City,” [オンライン]. Available:
https://en.wikipedia.org/wiki/Quezon_City.